

ドイツ中世都市史研究

における司教都市

魚 住 昌 良

I.

ドイツにおける中世都市史研究は、当初、とりわけでもライン・ドーナウ地方の司教都市——バーゼル、シュトラースブルク、ヴォルムス、トリエル、マインツ、アウグスブルクなど——を主たる対象として出発した。⁽¹⁾ドイツでもっとも早く都市集落の成立をみたのがこれらライン・ドーナウ地方のローマ諸都市の跡であったというたんにクロノロジカルな興味からばかりでなく、これらの諸都市が中世を通じてとくに重要な役割を果たしたからであったが⁽²⁾、研究者たちの興味が、なによりもまずこれらの諸都市の例によって——つまり12世紀以来急速に成長した新しい都市定住においてではなく、この古い司教都市の例によって、都市制度の淵源、発展、法的意味における都市の成立過程などをたどることに向けられたのであった。⁽³⁾ K.W. ニッチェ⁽⁴⁾をはじめとする前世紀後半から今世紀初頭にかけての都市史研究の多くは、この範疇に属する。その際、当時の学問的関心のひとつの背景をなした古典古代文化の連続・断絶問題⁽⁵⁾に関連した議論では、司教座所在地という機能によってローマ文化連続説の根拠とされたような諸都市についても、やがてトポグラフィーッシュな二重性が証明されたり⁽⁶⁾、法的連続性にいたっては明確な否定がなされていることなどに注目しておきたい。だが、この問題にたちいることは、本稿の目的ではない。

ところで都市史研究の関心は、周知のように、今世紀の初頭以来むしろセーナとラインの間の地域を中心とする北西ヨーロッパとハンザ同盟

を擁する北ドイツ地方に向けられるようになる。このような関心の転換の背景には、前世紀末から今世紀前半にかけて支配的となった都市史研究の基本構想があったことも周知のところである。¹⁸⁾すなわち、前記ニッチェのいわゆる荘園法説が克服された後の時期になると、都市発展の本質的ファクターとして「自由」の原則を追求するなかで、中世都市を近代社会の前史としてとらえようとする視角がますます顕著になったのであった。「中世都市」はもっぱら「封建社会」の対立物としてとらえられることとなったのである。G. v. ベロー、F. コイトゲン、F. レーリッヒなどにより、そして最終的にはH. プラーニッツによって体系化された考察法は、個々の問題におけるさまざまな相異はあっても、自由な商人こそ都市発展の諸段階における推進力であったとする確信において共通していた。ギルドに結集した自由な遠隔地商人たちが都市宣誓共同体ないし都市共同体の成立へと導き、都市の自由の獲得、都市参事会や都市貴族の形成へと導いた運動の担い手とされたのである。¹⁹⁾このような構想は、ライン・セーナ間地域や北ドイツの遠隔地商人層の研究を通してその妥当性が実証され、その成果を採用しつつ逆にライン・ドーナウ地域の古い司教諸都市についても都市発展の推進力としての自由な商人層の果たした役割をひきだすという具合にして、次第にヨーロッパ中世都市一般を説明する理論構成を方向づけることとなったのであった。

以上のような研究方向にたいしては、しかしながら、ドイツを含む西欧の学界ですでに十数年前から再び転換の気運が生じている。W. シュレジンガーは、都市建設における市民的企業家たちの主導権は否定できないとしても、最近にいたって、ときおり、それが余りにも過大評価されてきた、と批判し、²⁰⁾「ドイツの都市史も、主として北西部の史料を基礎として、余りにも一面的に自由な遠隔地商人の活動という光のなかでとらえられてきた。少なからざるドイツの諸都市、とくに司都諸都市においては、*homines ecclesiae*もまた本質的要素である。」と示唆した。コンスタンツの中世史学会も、1963年秋と64年春の2回にわたって「ヨ

「ヨーロッパ中世都市の社会構造」をテーマとして都市参事会や都市貴族層の実態を再吟味する方向で議論を展開した。¹¹⁵ E. エンネンが大筋においてブラーニッツと同じ系列にありながら、遠隔地商人の一方的重視を批判していることについては、筆者も触れたことがあった。¹¹⁶

このような批判的議論の続出にもかかわらずブラーニッツ学説の影響は依然として大きいという感を免れないのであるが、論争の過程で現われた注目すべき現象のひとつは、都市史研究にあたってさまざまな都市類型を考慮せよという主張であり、なかんずく、徹底的な地域研究と結びついた「類型」設定の提唱であった。¹¹⁷ このような類型設定の提唱と結びついて、ライン・ドーナウ地域に多い司教諸都市も、北や北西部のそれとは異なる都市類型として再び注目の対象となるはずである。事実、とりあえずこの司教諸都市に着目しながら従来の通説に大きな修正を迫る興味深い論稿が登場した。数年前 K. シュルツ氏によって相ついで発表されたミニステリアル層 Ministerialität に関する諸論稿がそれである。¹¹⁸ シュルツ氏は、トリエル、ヴォルムスなどライン地方の司教都市を例として、都市指導層のなかでミニステリアル層が果たした役割を明らかにし、かつ従前のミニステリアル観が都市史研究との関連で新しい角度から見なおさなければならないことを示唆してドイツの学界で大きな反響を呼びおこしたのであった。¹¹⁹ かつてニッチェなどによって注目されながら、¹²⁰ その後は、もっぱら遠隔地商人層の役割の追求に没頭した今世紀なかごろの研究史のなかで無視されるか、せいぜい例外的偶然的現象と見做されてきたミニステリアル層の意義を再評価しようとする試みである。

筆者は、後でも触れるように、シュルツ氏の主張とはややニュアンスを異にし、「封建制」に対立する「中世都市」というとらえ方ではなく、「中世都市」を封建社会のひとつの大事な構成的要素とみる立場からであるが、シュルツ論文の意義に着目し、主としてトリエルの事例をひきながらその論点を紹介し、若干の検討を試みたことがあった。¹²¹ この小稿

では、その折に紙幅の制約もあって触れることの少なかったヴォルムスに関するシュルツ論文の成果の一部を紹介することを通じて中世都市史研究をめぐるドイツの学界の議論の一端に触れ、筆者の前稿のひとつの補遺としたいと思う。司教都市を中心とするシュルツ氏の問題提起は、従来の都市史研究の構想に転換を迫るひとつの有効な契機となる、と考えたのである。

II.

司教都市を重視したかつての諸研究のなかでも、ヴォルムスはとくに注目をひいたが、そのことの背後には、この地に関して比較的早い時期に詳細な¹⁹年報の編纂がなされていることとともに、都市発展の評価にとって中心的な意味をもついくつかの重要な史料が残されているという事情があった。加えてザリエル朝、シュタウフェル朝時代のヴォルムス内部やヴォルムスをめぐる諸対立が、たんに地方的な事件にとどまらず、帝国全体にかかわる問題に結びついていた、という歴史的背景も指摘される。²⁰ところで前節で指摘した今世紀初頭の都市史研究対象の転換は、このヴォルムスについてもはっきりと認められ、若干のモノグラフィーを除いては、1897～1901年刊のH. ボースの活潑な大著²¹を超える新しい包括的研究はその後現れていない、という。²²シュルツ氏は、ヴォルムスの史料のなかに、都市ミニステリアル層の検証と判断にとって比較的確実な尺度を提供すると思われる若干の規定や規則——もっとも重要な史料は、都市参事会やその先縦組織の構成を規定した一連の²³都市法的文書である——が含まれていることに着目して、司教都市トリエルについて得た結論を拡大する立論の根拠をまずこのまちに求めたのであった。²⁴

いわゆる1156年のフリードリッヒ・バルバロッサ帝の特許状は、おそらく1200年ごろに偽造ないし改竄されたものともいわれるが、それでもこの時期、12世紀末ないし13世紀初頭の時期の実際の状況をよく反映していることが証明されている。²⁵この特許状のなかでわれわれの注意をひ

くのは、40名のメンバー（iudicus）を含む審議機関が都市の平和と治安の維持を監督しなければならない、という規定である。この審議機関には12人のミニステリアルと28人の市民が属することになっており、ヴォルムス都市参事会の先縦とされるものであった。⁶⁹

1231～2年、都市制度に関する帝国法上の諸規定との関連で司教と市民たちとの間に長期にわたる烈しい対立が起ったが、⁶⁸その結果都市はひとつの新しい規定に同意することを余儀なくされた。1233年のRachtungといわれるこの新規定は、ヴォルムスのその後の発展に重大な影響をもつ都市統治機構上の変更を含んでいた。新しい市参事会は、今後15人のメンバーで構成されること、そのうち9人は司教が指名する市民の代表、6人は市民の参事会員が指定するミリテース、すなわち騎士的ミニステリアルたちとする、というのである。^(26a)

新参事会構成員のこの数的関係は、ヴォルムスのミニステリアル層の位置を考える際の重要な手掛りを提供するものと言ってよいであろう。ヴォルムスの史料にもっとも精通していたといわれるボースは、この点に関連して比較的素直な観察をくだしており、都市ヴォルムスが独立性を求める対決に際してのミニステリアル層の影響力と市民層や都市的利害関心にたいするミニステリアルたちの関係を大要次のように特徴付けた。「都市行政の担い手は、当初は、すでに古い時代に収税吏、貨幣製造人、シュルトハイスなどの職務に関係したミニステリアルたちであった。その次に擡頭するのが古くから居住した市民たちであり、その声望は市内外の土地所有に基いた。市民たちは商業活動を通じてその資産を増大し、それを再び土地所有、地代収入に投下したのであった。12世紀末までは、ミニステリアルたちと都市門閥（後者は史料では常にcivesと記されている）とが協調して活動していた。都市統治の諸部門はその後、裁判権、警察権、铸貨権、関税徴収権、徴税権などを含めて、都市共同体の手に移った。参事会がすべての業務に関する唯一の代表者となったのである。だが、ハインリッヒ6世帝の死にはじまる帝国

国制の解体傾向は家人（＝ミニステリアル）層と市民層との協調の終了にも帰着した。ミニステリアルたちは、次第にその本来の任務から遠ざかり、比較的小さな土地所有者と癒合して騎士格の下級貴族に転化し、以後、都市の貴族の利害とその他の商工業を営む住民の利害もまた分離していった。これらの都市の貴族たちは、市民たちにたいしてよりも農村在住の貴族にたいしての方が親しみを感じるようになり、参事会内の騎士たちが市民層に敵対してほとんどの場合司教の側につくような一連の衝突が起るようになった。⁶⁷」というのである。ボースは別の個所で、「都市が自律性を追求したときにはじめて両身分の間の緊張関係が明かるみに出た。ミニステリアルたちは、今や農村在住の貴族となり、以後都市の生まれながらの敵となった。」⁶⁸とも述べている。ボースのこの叙述は、後年の都市史研究の主流の一部がそうであったように、ミニステリアル層の存在を無視するものではなく、少なくとも都市史の初期における影響力を認めるものであり、そのことは、ヴォルムスのような司教都市を対象とする以上、当然の帰結であった。だが、都市発展のその後の段階に関しては、とくに都市の自律性追求との関連で、市民階級の敵対者とみたわけで、この点では、ミニステリアル層の活動の事実を認めざるを得なくなった時点での遠隔地商人重視論者の基本的態度に通ずるものがある。⁶⁹

ボースの叙述に關説してシュルツ氏は次のように議論を展開した。⁷⁰ 6人の騎士の参事会員が都市ミニステリアル層を代表し、他方9人の市民の参事会員および13世紀の著名なヴォルムス都市貴族門閥は古くから同市居住のあるいは移住してきた自由人ないし古い商人家系の子孫であって、ミニステリアル層とは身分的にも従って利害関心の上でも異っていた、という前提から出発するならば、ボースの判断には、その大綱において賛成しなければならないであろう。なぜならば、13世紀の後半、就中その最後の三分の一期になると明確に騎士の参事会代表と市民の代表との間の対立という事実が観察されるからである。とくにはっきりと

このことを示すのは、9人の市民の参事会員たちの1283年の契約による取り決め——新しく選ばれた司教が、都市の古い諸特権と自由を、そして若干の厳密に限定された権利と要求を保証して誓約するまでは、その司教の承認、市内立ち入りを拒否する、という取り決めであった。なによりも司教は、騎士の参事会員たちが、市民の参事会員同様参事会宣誓をしているにもかかわらず、司教や聖職者やユダヤ人などとの争いにかかわるときには参事会の交渉に参加することを拒むという悪習を是正せよ、と求められたのであった。⁸⁸だが、ちょうどこのヴォルムスの場合にみられる騎士の参事会員と市民の参事会員との間のはっきりした分離や彼らの間にみられる緊張関係と利害の対立という現象にばかり気をとられた結果、都市ミニステリアルに関するまさしく一面的とも言える判断に導かれた、というのである。このような一面性は、この9人の市民の参事会員たちの身分的出自を再検討することによって明らかに示されるであろう、とシュルツ氏は考えたのであった。次にわれわれは、シュルツ氏に従って、これらの都市貴族家系の出自をたどっておきたいと思う。

III.

13世紀のヴォルムスでもっとも影響力をもつ都市貴族家系のひとつは、疑いもなくRicher家であった。9人の参事会員の筆頭として1283年の文書には“Nos Rigelmanus”と名指され、一時期は市長としても市政の頂点に立っていた。⁸⁹彼の父親は、矢張りヴォルムスの参事会員で市長にもなったHeinrich Richerという男であり、しばしば市のために、就中、ライン都市同盟の建設、拡充、強化に際して外交的使命を帯びて活躍した、という。⁹⁰ハインリッヒの父として、かつこの家系では史料初出の人物として、1208～28年にわたってRicherという名前が現れるが、⁹¹この、Richerは、1216年の史料が示すように、旧制度の40人参事会に属していた。ところでその同じ史料でこのRicherusは“de ministerialibus”の

欄で示される。だがそのすぐ後1218年の史料では——その史料では “de ministerialibus” と “de civibus” を分離した証人リストのなかで参事会構成員の名前を明記しているのであるが——civesすなわち市民の参事会員として挙げられている。⁶⁸

この同じ史料にRicherusと並んでHeinricus Militellus (= Ritterchen) というヴォルムス市参事会員が登場するが、この家系に関しても、Richerとその子孫において観察されたのと非常によく似た展開が確認された。すなわち、1196～1227年の史料にしばしば登場するHeinrich Ritterchenは、2回ミニステリアルルのグループに所属して言及され、さらに何回かは、はっきりとヴォルムスのミニステリアルルたちの間で名前が挙っている。⁶⁹ このハインリッヒ・リッテルヘンは、だがその後には、市民の参事会員たちの間にも現れる。⁷⁰ ともあれこのリッテルヘン家は全13世紀を通じて指導的な都市貴族家系に属しており、1263～96年にかけて証明されるWernherus Militellusは参事会員であり、時には市長でもあった。⁷¹

もっと影響力が大きかったと思われるDirolf家の場合は、その先祖Dirolfが1216年の史料にはじめて司教の家人(=ミニステリアルル)として言及された後、⁷² さらに数回参事会員として登場するが、今度は市民の代表たちの間で言及されている。⁷³ 彼の家系は、次の時代に入ってもいつも市民の参事会員たちの間に見出され、多くの場合市長職にもついており、市の重要な外交的課題を任せられたりした。⁷⁴

以上は、シュルツ氏が提示した多数の事例の一部に過ぎないが、紙幅の制約もあるので、ここではその他 Holtmund, Judeus, Rufus などさらに多くの家系についてまったく同じような展開過程——つまり、かつてミニステリアルル層に属していたものが次第に市民の有力家系に転化してきている様子が、史料によって証明されていることを示唆するに留めたい。証人リストを中心とする史料をさらに突込んで検討すれば、都市ミニステリアルル層の評価や参事会、都市貴族の形成を解明するため

の興味深い、場合によっては従来の常識をくつがえすような示唆も得られるであろう。ここではさし当って、13世紀にもっとも影響力をもったヴォルムスの市民の参事会員ないし都市貴族家系の多くの部分に関して、司教のミニステリアル層からの出自が証明されたことだけを確認しておきたいと思う。

ところで市民の参事会員の比較的多くの部分がミニステリアル層の出自であったことの確認は、ミニステリアルたちの隸属関係から生ずる制約が司教にたいして友好的、従って都市の自由と独立の拡充にはマイナスに働く結果となったのではなかろうか、という問いを惹起することにもなるであろう。事実、ヴォルムス市史研究の多くは、1230-33年の司教と都市の対立とその対立の帰結であるRachtungをそのような方向で判断した。⁴⁰ 古い40人参事会に代って、司教指名の9人の市民代表とその市民代表が選ぶ6人の騎士の計15人で構成される新参事会が、司教とともに2人の市長——そのうちひとり司教により、他のひとは国王によって指名される——の指導下に都市の諸案件を決定するとした1233年の規定は、都市領主たる司教の大きな成果として、かつ、都市の自由の発展にとっての重大な後退を意味するものと評価されてきたのである。この時期までは独立であって強力に都市の利害を代表し司教に対立してきた参事会が、この時点で都市領主に依存し制約される役所になってしまった、というのである。

このような判断においては、ミニステリアル層と市民の参事会員の割合が12:28から6:9へと変化したこと、すなわちミニステリアル層の比重の相対的増加という単純な事実が大きく作用したように思われる。だが、この点に関しては、上述の指摘を想起していただきたい。すでに40人参事会においても、ミニステリアル層出身の者たちが市民代表として入っていたということ、従って事実上は12人よりずっと多くのミニステリアル要素が入っていたことに留意しなければならないのである。このことをはっきりと示す史料は、たとえば、1216年の一文書で

ある。その文書では、22人の参事会員の名前を "de ministerialibus" という名称の下に載せている。当時の参事会は、制度的には12人のミニステリアルと28人の市民から成立っていたはずであるから、ここでミニステリアルと名付けられた参事会員たちの少くとも10人は市民の代表と見做されていた、と考えなければならない。このことは、ここで挙げられた者のうち、たとえばハインリクス・ミリテルス、リヘルス、ディロルフスなどに関しては、上述の証人リストの言及などとの対比から比較的容易に推定されたのであった。⁴⁵ また、個々の参事会員や都市貴族家系に関してなされた検討のなかで、1232年の対決に際して破門や帝国追放刑の宣告を受けたような人物ないし家族が、古い40人参事会ばかりでなく、33年以後にも再び市民層の代表として、また参事会員として史料に現われている、という指摘は重要である。上で触れたリッヘル、リッテルヘン、ディロルフ、ホルトムント、ユーデウス、ルーフスなどはすべて該当するという。⁴⁶

もうひとつ——これは都市参事会の構成の実態をめぐる制度史的興味からも重要であるが——1216年以降は、参事会の言及に際してもはや11~15名以上のメンバーが載せられていないこと、従っておそらくより小さな審議機関がすでに1233年より前に事実上存在し、重要事項に関して都市の利害を代表していた、という推定にも注目しておきたい。⁴⁷ つまり33年のRachtungで突然変わったのではなく、Rachtungは、むしろすでに起っていた事実関係の追認という性格をもっていたことを推測させるのであり、その意味で、従来の市史研究が下したRachtungの評価には若干の限定が必要とされる、というのである。確かに40人参事会には、新しい15人参事会よりは強力かつ効果的に司教に対抗して都市の利害を代表し得たという側面もあったであろう。だが、ほとんど同一の人物ないし家系の者たちが、Rachtungの前後を通じて一貫して市の指導権を保持し続けたという事実から、シュルツ氏は、要求された司教の自由な指名権なるものは、おそらくは強く制約されたものであったであろう、すな

わち司教は非常に限定された範囲の家族からのみ市民代表たる参事会員を選び得ただけに違いない、と主張した。33年のRachtungは、司教と市との間の真に妥協の産物であった、と考えたのである。⁴⁸

ところで、33年のRachtungによる数的構成要素の変化に関連して示された参事会の都市領主への依存度増大という判断は、13世紀の市民代表参事会員の多くがミニステリアル出自であったとするシュルツ氏の検討結果を併せて考えるならば、都市発展にたいするもっとネガティブな評価を惹起するかもしれない。シュルツ氏はこれにたいして、参事会に同一人物・家系が留っていたという上述の指摘に加えて、とりわけ13世紀を通じて見出される市民層の指導的代表者たちと司教との鋭い対立⁴⁹という事実を引きあいに出して反論し、司教のミニステリアル（ないしその後裔）だから司教にたいする強い依存関係にあったであろうとする短絡を根拠のない推定として退けた。この点に関するシュルツ氏の構想は、トリエルのミニステリアルの司教にたいする姿勢について繰返し実証された結論⁵⁰と軌を一にするものである。加えてシュルツ氏は、13世紀就中33年のRachtungをめぐる時期の参事会指導層が都市発展にたいしてもった意義をネガティブにみる判断が、史料的には、16世紀のはじめに編纂された年代記抜粋に拠るところが大きかったこと、その年代記抜粋が、都市門閥とツンフトの対立を含んだ15世紀末の視角からさかのぼって13世紀の状況を解釈した編者たちの意識を反映したものであったことを指摘した史料批判を展開しているが、ここではその詳細に立ちいることは避けたいと思う。

IV.

以上の検討を通して、われわれは、少くとも司教都市ヴォルムスに関する限り、従来の都市史研究の通説から受ける予想に反して、都市共同体の形成・発展期におけるミニステリアル層の存在を無視し得ないこと、それどころか都市発展にたいする積極的な役割を果たしてさえいたこ

との確認を迫られるであろう。シュルツ氏は、さらにこのミニステリアル層を含めた都市指導層と都市領主たる司教との対立関係をも強調しているが、この点については、トリエルの場合ほど詳細かつ具体的に触れてはいないという印象を受ける。都市領主との関係はともあれ、ミニステリアル層が都市貴族層を構成する有力な一員としておそらく商人層とも密接な関係をもって都市の発展を規定したであろうことだけは確認されてよい。

12, 3世紀のヴォルムスの遠隔地商業に関しては、実は個々にわたっての証明はできていないが十分に推定できることとして、その場合の商業活動にミニステリアル層ないしその後裔が関与していることを、シュルツ氏は示唆している。⁵⁵つまり、ミニステリアルたちは彼らの所領や権益からの収入に満足して、よく言われるように、都市の経済生活と本当に無縁であったのであろうか？それとも彼らは商業にも参加していたのであろうか？という設問を提出し、従来の研究が、ミニステリアル層と商人層との間に原理的な一線を画し、その二者択一理解から都市史研究を進めてきたことにたいする批判を投げかけたのである。この点ヴォルムスに関しては、まだ必ずしも十分に説得的な論証を得てはいないように思われるが、他の諸都市、たとえば、帝国都市フランクフルト、ニュルンベルク、ウルム、ラーフェンスブルクについて、あるいはフライブルクやレーゲンスブルクなどについて広くミニステリアル層と商業の密接な結付きを示す事例のあることが示唆されている。⁵⁶要するに、商業経済活動を通じてミニステリアルたちは他の市民層と共通の利害関心をもっていたのであり、その点でも市民たちの利益を代表して都市領主に對抗するだけの基盤を備えていた、というのがシュルツ氏の主張であり、そう主張することを通して、シュルツ氏は、ミニステリアル＝封建世界に属するもの、従って近代社会の先縦たる中世都市の発展にたいしてはマイナスの存在であったとする通説を批判しようと試みたのであった。言い換えれば、シュルツ氏の場合は、ミニステリアル

層は、近代社会の先縦たる中世都市の発展にとってプラスの働きをしたとする想定に立つこととなる。

筆者は、冒頭でも触れたように、中世都市を「封建制」のなかでとらえようとする立場から、その都市の重要な担い手のひとつとなるミニステリアル層が封建的な属性をもっていたとすること自体に反対はしない。ただしそれは、在来の諸研究が強調してきたような、自由な商人層との対立関係において位置付けられたそれではない。シュルツ氏の問題提起をうけて、ミニステリアル層と遠隔地商人層との親近性をも充分に想定した上で、その両者をひっくるめた「中世都市」そのものの性格について、氏とはやや異った視角から問題としたいと考えている。このことは、別稿でも述べたように、⁶⁹シュルツ氏も結局はそのなかに立つこととなるヨーロッパ都市史研究の伝統的な考え方、すなわち、封建社会に異質な、いわば近代化の胚芽としての中世都市を考える立場とは別の視角に立つことを意味することとなるであろう。筆者としては、ミニステリアル層と商人階層との親近性を強調したシュルツ論文の主張には耳を傾けると同時に、そのようにしてミニステリアル層や商人階層を含めた中世都市共同体が、必ずしも常にヘルシャフトリッヒな勢力にたいて基本的な対抗関係にばかりあったのではない、ということにも留意したいと考えている。

ミニステリアル問題そのものについては、まだまだ問題点もあるし、反対論もある。⁶⁹ここではそれらの詳細に立ちいることはしないで、シュルツ論文の着眼がそもそも司教都市の考察からはじまったこと、そしてそのことが研究史の流れのなかで決して偶然とは言えない意味をもったことを示唆するに留めたい。司教都市の考察を通して浮かびあがった問題提起が今度は将来の中世都市史研究一般の再構想をうながす刺戟のひとつとなるであろうことを想うのである。すでにシュルツ氏自身もミニステリアル問題を司教諸都市にのみ限定して考えているのではなく、またシュルツ論文に刺戟されて他の諸都市——司教都市ではない他の諸

都市について同じ問題を追求した研究も相次いで発表されている。⁵⁷⁾ 本稿では、そのような研究史の現状のなかで、司教都市ヴォルムスに限定したミニステリアル問題の紹介を試み、筆者の別稿の補遺とすることで筆を擱きたいと思う。(7. 9. 74)

注

- (1) 研究史については、さし当り宮下孝吉『ヨーロッパにおける都市の成立』1953を参照。
- (2) 中世盛期のもっとも重要な都市がライン地域にあったことは、たとえばLütge, F., *Deutsche Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 1952 S.116などを参照。
- (3) Schulz, K., *Die Ministerialität als Problem der Stadtgeschichte—Einige allgemeine Bemerkungen, erläutert am Beispiel der Stadt Worms* (in: Rhein. Vjbl. 32, 1963) S.196/7参照。
- (4) たとえば, Nitzsch, K. W., *Ministerialität und Bürgertum im 11. und 12. Jahrhundert—Ein Beitrag zur deutschen Städtegeschichte*, 1859
- (5) 古典古代文化連続・断絶問題と都市史との関連については、たとえばEnnen, E. *Frühgeschichte der europäischen Stadt*, 1953 S.9 f. 参照。
- (6) Beyerle, E., *Zur Typenfrage in der Stadtverfassung*, 1930; Ennen, Ibid, S.122に拠る。拙稿「ドレストットの消長」(亜細亜大学「諸学紀要」11号, 1964) 46頁参照。
- (7) Mitteis, H., *Deutsche Rechtsgeschichte*, 2. Aufl. 1952 S.135世良訳『ドイツ法制史概説』299頁参照。
- (8) ヨーロッパ中世都市史研究をささえた問題意識については、たとえば、拙稿「ヨーロッパ中世都市史研究の視角について」(山梨大学「教育学部研究報告」21号1971, 同「歴史論集」14集) 35頁以下を参照。
- (9) Below, G. v., *Zur Entstehung der deutschen Stadtverfassung*. HZ58, 1887, S.193 ff. u. HZ59, 1888, S.193 ff.; Ders., *Der Ursprung der deutschen Stadtverfassung*, 1892; Ders., *Kritik der hofrechtlichen Theorie* (in: *Territorium u. Stadt*, 2. Aufl. 1923, S.213~27); Keutgen, F., *Untersuchungen über den Ursprung der deutschen Stadtverfassung*, 1895; Ders., *Ämter und Zünfte. Zur Entstehung des Zunftwesens*, 1903; Rörig, F., *Die europäische Stadt und die Kultur des Bürgertums im Mittelalter*, 2. Aufl. 1955; Ders., *Wirtschaftskräfte im Mittelalter. Abhandlungen zur Stadt- u. Wirtschaftsgeschichte*, 1959; Planitz, H., *Kaufmannsgilde u. städtische Eidgenossenschaft in niederfränkischen Städten im 11. u. 12. Jh.* ZRG GA60, 1940. S.1-116; Ders., *Frühgeschichte der deutschen Stadt*. ZRG GA63, 1943, S.1~91; Ders., *Die deutschen Stadtgemeinden*. ZRG GA 64, 1944. S.1—85;

- Ders., Die deutsche Stadt im Mittelalter. Von der Römerzeit bis zu den Zunftekämpfen, 1954 など。
- (10) Schlesinger, W., Verfassungsgeschichte und Landesgeschichte (in: Beiträge zur deutschen Verfassungsgeschichte des Mittelalters, Bd. II 1963) S. 34
- (11) Ibid, S. 34/35 傍点は筆者。
- (12) 学会の成果は Vorträge und Forschungen XI (Untersuchungen zur gesellschaftlichen Struktur der mittelalterlichen Städte in Europa) 1966 に収められている。
- (13) 拙稿「ドレスタットの消長」43頁以下と53頁以下。
- (14) たとえば Ennen, E., Aufgaben der landschaftlichen deutschen Städteforschung aus europäischer Sicht (in: Blätter f. deut. Landesgesch. 93. Jg. 1957. S. 1 ff)
- (15) その第一はトリエルに関するシュルツ氏の学位論文 Schulz, K., Ministerialität und Bürgertum in Trier. Untersuchungen zur rechtlichen und sozialen Gliederung der Trierer Bürgerschaft vom ausgehenden 11. bis zum Ende des 14. Jahrhundert, 1968 であり、今ひとつは、ヴォルムスについて同じ主題を追求した同氏の前掲論文 (注3 参照) である。
- (16) たとえば、西南ドイツ都市史研究会 Arbeitskreis für südwestdeutsche Stadtgeschichtsforschung は、1970 年秋の第9回大会の共通テーマを〈Stadt und Ministerialität〉とし、専らシュルツ学説の検討を中心に活潑な議論を展開した。大会の報告者とテーマについては筆者の別稿 (注18 参照) 40/41 頁注4 の後段を参照されたい。なおこの問題をめぐる議論は、すでにドイツ以外のヨーロッパの学界の一部でも注目されており、上記学会の報告者や参加者がスイス、フランス、オーストリア、ポーランドなどにわたっていたことから、今後さらに波及するであろうことが予想される。フランスではすでに Ph. ドランジェがシュルツ論文の紹介と批評を書いている。Dollinger, Ph., "Extrait du fascicule" (*Revue Historique* 241, 1969)
- (17) Nitsch, Ibid.
- (18) 1973 年 7 月 21 日「中世都市における Ministerialität—シュルツ氏の所説をめぐって」と題して、比較都市史研究会の例会で報告。その内容に若干の加筆・訂正をしたものは、「中世都市におけるミニステリアル層——シュルツ学説を中心として」(山梨大学教育学部紀要 5 号 56~78 頁) として近刊の予定。(付記。この後本稿印刷中の 1974 年 11 月に公刊された。)
- (19) Quellen zur Geschichte der Stadt Worms, Bd. I u. II: Urkundenbuch der Stadt Worms, 1886 u. 1890 Bd. III: Monumenta Wormatiensia—Annalen u. Chroniken, hrsg. Boos, H., 1893 (以下 WUB I, II … と略記) がもっとも重要

な史料集。ここではたとえば、司教Burchardによって記録された1024年頃の荘園法(WUB I, Nr. 48, S. 39—45), 1073年のヴォルムス市民の蜂起に関するLampert von Hersfeldの報告(Lamperti monachi Hersfeldensis opera, hrsg. v. Oswald Holder—Egger, MGH SrG in usum schol. 38, 1894, S. 169), 1074年ハインリッヒ4世帝が市民たちに与えた関税特権(MGH DH IV, Nr. 267), ハインリッヒ5世帝とフリードリッヒ1世帝がシュバイエルとヴォルムスにたいして承認した荘園法的義務・貢租の免除(Hilgard, A., Urkunden zur Geschichte der Stadt Speyer, 1885, Nr. 14 u. Nr. 18—WUB I, Nr. 62 u. Nr. 90), 1231/32年のStatutum in favorem principumに関連するヴォルムスの一群の該当史料(WUB I, Nr. 147, 148, 154—160, 163—166)などが考えられている。Schulz, Die Ministerialität als Problem……S. 196 Anm. 28, S. 197 Anm. 29に拠る。

- (20) Schulz, Ibid, S. 197 なおヴォルムスの略史については、さしあたり Sachwörterbuch z. Dt. Gesch. hrsg. v. Rössler, H. u. Franz, G., S. 1427 f.; Handbuch d. Hist. Stätten Dtld. — Rheinland-Pfalz u. Saarland, hrsg. v. Petri, L., S. 410 f.などを参照。
- (21) Boos, H., Geschichte der rheinischen Städtekultur von den Anfängen bis zur Gegenwart mit besonderer Berücksichtigung von Worms, 4 Bde, 1897—1901
- (22) Schulz, a. a. O., S. 198
- (23) Ibid
- (24) pax Wormatiensisと呼ばれるこの文書に関して偽造の疑いのあることをはじめて指摘したのは、Stumpf(Sitzungsberr. d. Preuß. Akad. d. Wiss. phil. hist. kl. X X X II. 1860, S. 603 ff.)であり、C. Koehne (Der Ursprung der Stadtverfassung in Worms, Speier und Mainz. in: Untersuchungen z. Dt. Staats- u. Rechtsgesch. hrsg. v. Gierke, O., 31. Heft, 1890) がこれに賛成し、K. Schaub (Die Entstehung des Rates in Worms. in: Z. f. d. Gesch. d. Oberrheins, 42 N. F. Bd. III, 1888) は文書の真実性を弁護した。ボースは、「内容に関しては、疑いを起させる理由はない。ただその議事録が現存の形では不可能である。おそらく原本がなんらかの仕方^{so}で毀損された後で市がコピーを作らせた」(Boos, Ibid. S. 419)と推定した。Schulz, a. a. O., S. 198 Anm. 30に拠る。
- (25) WUB I. Nr. 73, S. 59 史料では1198年にはじめて“de quadraginta iudicibus in Wormatia”について言及され(WUB I, Nr. 103, S. 82), その後間もなく consilium, consiliarii, consulesに言及される(Neubauer, A., Regesten des kl. Werschweiler, Nr. 16. S. 91/92=1202年; WUB. II. Nachträge……S. 721/22=1215年; WUB I, Nr. 120 S. 92/93=1216年; Nr. 125. S. 97=1220年)。40人審議会^{Stadtrichter}は、それ故間もなく都市ヴォルムスの都市参事会に発展していたと推定されるのである。Schulz, S. 198 Anm. 30に拠る。

- (26) 事件の詳細についてはBoos, a. a. O., I. S. 465～556; Koehne, a. a. O., S. 309～41を参照。Schulz, S. 198 Anm. 31に拠る。
- (26a) WUB I, Nr. 163/4 S. 122/24 *Rachtung*はさらに次の規定を含む一国王は新しい参事会員たちのひとりを1年ないしもっと長期にわたる市長に選ぶ。司教は毎年6人の騎士の参事会員のなかからもうひとりの市長を選ぶ。司教と参事会は共同で毎年マルティン祭の日にシュルトハイスと職員たちを選ぶ。彼らはまた共同で、租税の管理のために、4つの各教区から4人ずつ計16人を選ぶ。貨幣製造人組合員と毛皮製造人を除くすべての団体の廃止など。Schulz, S. 199 Anm. 32に拠る。
- (27) Boos, a. a. O., II. S. 62/63. Schulz, *Ibid.* Anm. 33に拠る。
- (28) Boos. *Ibid.* I, S. 423. Schulz, *Ibid.*に拠る。
- (29) 拙稿, 前掲38～40頁, 53頁参照。
- (30) Schulz, S. 200 f.
- (31) WUB I, Nr. 405, S. 265 なおこれらの争いは, シュルツ氏によれば, 騎士の参事会員たちとの紛争なのであって, ミニステリアル(騎士)層と市民層の間の原理的分裂ではない, とされる。Schulz, S. 200 Anm. 36
- (32) WUB I. Nr. 378, S. 244, Schulz, S. 200 Anm. 37
- (33) WUB I. Nr. 113, S. 89; Nr. 171, S. 125; Nr. 173/74, S. 126/27 (Heinrico iuniori filio Richeri civi Worm); Nr. 184, S. 131; Nr. 201, S. 141; Nr. 217, S. 150; Nr. 225/26, S. 153/54 (=magister civium); Nr. 228. S. 154/55; Nr. 250, S. 167 (mag. civ.); Nr. 252, S. 169 (W. Vertreter im Rhein. Städtebund—vgl. auch Nr. 325, S. 214/15) など。もっともこの史料の言及の期間が余りにも長過ぎる(1209年?ないし1226年～1276年)ので, 果して同一人物なのかそれとも二人の同名人(父と子)を意味するのかははっきりしない。Schulz, S. 201 Anm. 38
- (34) WUB I, Nr. 112 S. 89……Nr. 143, S. 106; Schulz, *Ibid.*, Anm. 39
- (35) WUB I, Nr. 120, S. 92/93 Schulz, *Ibid.* Anm. 40
- (36) WUB I. Nr. 121, S. 93/94; Nr. 133, S. 101; Nr. 135, S. 102も参照。Schulz, *Ibid.*, Anm. 41
- (37) WUB I. Nr. 98, S. 79; Bonin, UB Pfeddersheim, Nr. 25, S. 16/17; WUB I. Nr. 118, S. 91/92 (ministeriales); Nr. 120, S. 92/93 (=ministeriales-de consilio);……Nr. 141, S. 105など。Schulz, *Ibid.*, Anm. 42. なお, Ritterchen家のミニステリアル身分については, Ulricus Militellusに言及して賞讃しているChronicon Wormatienseによる傍証もある。WUB III. Chronicon Wormatiense saeculi X III S. 176, Schulz, S. 202 Anm. 45
- (38) WUB I. Nr. 121, S. 93/94; Nr. 128/29, S. 99; Nr. 132, S. 100/01 (de consiliabus); Nr. 136, S. 102 (de consilio), Schulz, S. 201 Anm. 43
- (39) WUB I. Nr. 310, S. 207; Nr. 324, S. 214; Nr. 344, S. 223/24 (=mag. civ.)……

- Nr. 471, S. 310; Schulz, S. 202 Anm. 46
- (40) WUB I. Nr. 120, S. 93. Schulz, Ibid. Anm. 47
- (41) WUB I. Nr. 132, S. 101; Nr. 136, S. 102 Schulz, Ibid. Anm. 48
- (42) Cunradus Dirolfi (1233~1262): WUB I. Nr. 170, S. 215; ……Nr. 217, S. 150; Nr. 225, S. 153; Nr. 228, S. 155; Nr. 234, S. 157 (mag. civ.); Nr. 250; S. 163; Nr. 302, S. 203. Heinricus Dirolfi (1279~1300): WUB I, Nr. 401, S. 265; Nr. 479, S. 315; Nr. 509, S. 344; なお Wormser Chronik von Fr. Zorn, S. 68, 98, 103, 107, 118-120 と WUB II. Register の Dirolfi の項参照。Schulz, Ibid, Anm. 49
- (43) Schulz, S. 202 f. 参照。
- (44) Arnold, W., Verfassungsgeschichte der deutschen Freistädte im Anschluß an die Verfassungsgeschichte der Stadt Worms, 1854, Bd. II S. 35 / 36; Koehne, a, a, O., S. 327 f., Boos, a, a, O., I. S. 494; Rüttimeyer, E., Stadtherr und Stadtbürgerschaft in den rheinischen Bischofsstädten. Ihr Kampf um die Hoheitsrechte im Hochmittelalter (in: Beihefte z. VSWG. X III, Heft. 1928) S. 46 u. 82 など。Schulz, S. 206 Anm. 80 に拠る。
- (45) Schulz, S. 207 Anm. 81
- (46) Schulz, Ibid Anm. 82
- (47) WUB I, Nr. 132, S. 101; Nr. 136, S. 102; Nr. 143, S. 106 など参照。Schulz, S. 208 と Anm. 83
- (48) Schulz, S. 208
- (49) 市民たちと司教との対決については、上掲 Boos, I. S. 465 f. の他、13世紀に関して広範に伝っているヴォルムスの年代記を参照。Chronica civitatis Wormatiensis per monachum quendam Kirsgaitensem (WUB III. S. 1—95); Annales Wormatienses 1226~1278 (WUB III. S. 163—199) など。Schulz, S. 208 Anm. 84 に拠る。
- (50) Schulz, Ministerialität und Bürgertum in Trier, S. 28 f. 拙稿前掲 43 頁以下を参照。
- (51) Schulz, Ministerialität als Problem …… S. 209 f.
- (52) 本稿上述の注 49 参照。
- (53) Schulz, a, a, O., S. 217
- (54) Schulz, S. 195 f. 拙稿前掲 56 頁参照。
- (55) 拙稿, 前掲 58 頁。
- (56) 反対論の代表的なものは、西南ドイツ都市史研究会第 9 回大会における J. Fleckenstein 報告 (Die Problematik von Ministerialität und Stadt im Spiegel Freiburger und Straßburger Quellen. in: Stadt und Ministerialität, Protokoll d. IX. Arbeitstagung f. südwestdeut. Stadtgeschichtsforschung, 1973, S. 1—15). 拙稿, 前掲 57 頁以下を参照。

- 57) たとえばWunder, G., Die Ministerialität der Stauferstadt Hall; Bradler, G., Die Entstehung von Städten und die Ministerialität in Oberschwaben und im Allgäu など。いずれも、上掲西南都市史研究会のProtokoll所収。

“Episcopal City” in the Studies of Medieval Cities in Germany

« Summary »

Masayoshi Uozumi

In contrast to the older trend in the last century, recent research on the history of the medieval cities in Europe has laid stress on the Seine-Rhein region and North Germany, in which the “Fernkaufleute” (merchants, who engaged in business far and wide) as the driving force for the formation and development of the medieval cities were more easily and evidently observed. In this situation the articles of Schulz, which were published successively several years ago, reminded us of the necessity of the revaluation of the old Episcopal cities, especially, in the Rhein-Donau area; disclosing the contribution of the “Ministerialität” in the “Bischöfsstädten” (Episcopal cities) on the Rhein as Trier, Worms etc. he criticised the former prevalent idea which had little regard on the Ministerialität in the studies of the “city-history” in Europe. In this article I would like first of all to introduce the Schulz’s theses to the Japanese academic world and therewith to refer to the discussions held in Germany on the “city-history” of medieval Europe, especially relating to Worms. Being a little different from Schulz, I take a stand on holding, that the “medieval cities” should be grasped “not as against” but belonging to feudal society, i.e, as a constitutive element of the society.